

大東文化大学 東洋研究所所報

2015.6 No.63

目次

老心轉淒然 東洋研究所所長 中林 史朗	1
2015年度 東洋研究所共同研究課題	2・3
専任研究員 業績	4
2014年度 東洋研究所共同研究班活動報告	4・5
〔国際交流講演会〕カール・ハウスホーファーの地政学理論と 日本の「大東亜共栄圏」構想 本学外国語学部准教授 クリスティアン W. シュパング	

2015年度 人事・名簿	7
2014年度 東洋研究所会議報告	7
東洋研究所の理念・目的	8
新刊案内	8

老心轉淒然

東洋研究所所長 中林 史朗

新緑の時節も既に過ぎ、將に初夏に爲らんとする日々であります。皆々様には御清栄の事と拝察申し上げます。

小生儀、今般圖らずも此の四月より、東洋研究所所長と言う大任を拜命致し、「自は意はざりき」の感無きにしも非ずであり、果たして小生の如き愚鈍で粗野な輩に務まるものや否や、將又其の職責の重さ等々に、些か困惑狼狽し、老心何事か轉淒然たる心境であります。

然りと雖も、唯嘆息するのみに時間を勞する事は許されず、東洋研究所と雖も大學内の一研究機関である以上、現況の如き大學が身を晒す環境の厳しさは、取りも直さず研究所自體も感得せねばならぬ秋烈さであると、深く理解する所であります。

本研究所は、僅か四人の専任研究員を擁するに過ぎざるも、日欧經濟交流・日中近現代政治史・中國天文學史・日中類書研究等に關わる、應に一騎當千・精鋭の士の集まりであり、此の四人を中心に全十班の研究班を構成し、學内外を問わず、八十人近くに垂とする研究者の方々が、各々専門とする各班に御參集賜はり、日々活潑な研究活動を展開致しております。

此れら各班の研究成果は、班の研究対象に含まれる内容である事を条件に、共同研究成果であれ將又個人的研究成果であれ、本研究所の研究著作物として、單年度或いは連年を問わず、鋭意出版公刊致しております。

亦た、本研究所は、單に研究活動のみに邁進する組織では無く、研究成果を一般の人々に還元すべく、年に一度の公開講座と言う形式で、社會との接触を圖っており、更に此れも年に一度に過ぎませんが、



海外の研究者を招いて講演會を開き、國際交流にも盡力致しております。

此の四月以後は、所内會議を度々を開き、對外的に更なる活潑な活動は出来ないものか、所蔵書籍の對外的公開に關する方法や如何、或いは研究所主催の総合的學會發表は開催可能や否や等々、互いのアイデアを提示し合い、忌憚のない激論を交わしております。

一見外部からは、其の日常的且つ具體的活動状況が見え難き研究所であり、「一體何を行っているんだ」と、時には叱責を被る事も決して無い譯では有りませんが、専任研究員一同、斯様に孜孜兀兀として研究活動に従事し、日夜研鑽に励んでおります。

小生も所長として、學部との兼任ではありますが、研究所の更なる發展的活動と、研究員諸士の研究支援等に、微力ながら努力を傾注して行く所存でありますれば、何卒皆々様の暖かい眼差しで、御指導・御鞭撻を賜りたく、宜しく御願ひ申し上げます。

(文学部中国学科 教授)

2015 年度 東洋研究所共同研究課題

第1班	東洋における異文化の本質的相違性に関する研究
	<p>期間 2013～2015年度（研究期間中）</p> <p>メンバー（11名） 團山田準〔主任〕 團岡崎邦彦・小林春樹・田中良明 団田中寛・中村昭雄・田辺清・井上貴子 団片岡弘次・福田俊昭</p> <p>概要 今日複雑な社会情勢を眺める人は、多様な価値観の存在を相互に認め合うことの必要性を痛感するであろう。地球という有限な環境の中で、多くの生命が共存する社会の在り方が模索されねばならない。本共同研究は、こうした「共生社会」の創造を視野において、東洋における異文化及び東西文化に見られる相違性を抽出することを目指している。異文化の根底にある相違性が認識されれば、相互理解への途も開けてくるであろう。21世紀における新しい社会の創造を探索して先駆的な研究を進めていきたい。</p>
第2班	20世紀・21世紀における日中関係と中国の対外抵抗・対内改革・世界大同
	<p>期間 2015～2017年度（継続）</p> <p>メンバー（18名） 團岡崎邦彦〔主任〕 団村井信幸・葛目知秀・高安雄一・篠永宣孝・内田知行・柴田善雅・鹿錫俊・齋藤哲郎 団伊藤一彦・上野英詞・植松希久磨・嶋亜弥子・由川稔・鏡屋一 団小島麗逸・近藤邦康・中島宏</p> <p>概要 研究班の研究計画は3年間の短期計画と10年をかけた長期計画から構成される。まず3年間をめぐり、20世紀依頼の日中関係、中国の対外政策、内政、さらにそこで提起された「世界大同」の事実を検証する。20世紀中国は、帝国主義への抵抗から、建国後平和共存の五原則の提起へと対外関係（世界認識）を変化させ、また中国国内の対内改革、民衆の自由、社会主義建設を巡って大きく変貌を遂げてきた。その間、平和共存の中国外交や人民公社などの新たな世界、社会モデルが提起され、社会の共存とそれを支える文化革命が求められてきた。これを現代中国の「世界大同」の創造の一部とみて、これを検討していくことである。さらに中国20世紀以来の対外抵抗、対内改革と日本は深く関わりをもっており、課題も多いが、日中間で「世界大同」のモデルを経済から政治、さらに文化面へと実践していくことも可能である。10年長期計画については、1921年から2021年の中国共産党史の資料整理と100年史研究を進める。</p>
第3班	諸外国における東西文化研究
	<p>期間 2014～2016年度（研究期間中）</p> <p>メンバー（6名） 團山田準〔主任〕 団クリスチャン W. シュパンゲ 団エリオット・ミルトン、フレデリック・ジラル、マリア・キアラ・ミリオーレ、クリスティーナ・ラフィン</p> <p>概要 国際交流を目的とし、諸外国における日本研究や東洋研究がどのように行われているかを各研究員の究テーマを中心に発表し、諸外国の東西文化研究の動向と研究交流の可能性を探る。</p>
第4班	日中文学の比較文学的研究—『藝文類聚』を中心にして—
	<p>期間 2014～2016年度（研究期間中）</p> <p>メンバー（10名） 団中林史朗〔主任〕 團田中良明 団日吉盛幸・浜口俊裕・小塚由博・藏中しのぶ 団福田俊昭・芦川敏彦・関清孝 団成田守</p> <p>概要 本邦に伝来する最古の現存類書の『藝文類聚』は、我が国の古典文学に多大の影響を与えていることは周知の事実である。それが今日に至るまで雑家の書として等閑視されてきた嫌いがある。それ故、未読解の本書を訓読して、原典との校勘、典拠の解明、索引の作成をすることは、単に国文学への影響のみならず、類書学上においても大いに貢献するものであると考える。その研究成果を逐年刊行して今日に及んでおり、斯学の評価を得ている。</p>
第5班	西欧植民地主義再考
	<p>期間 2014～2016年度（研究期間中）</p> <p>メンバー（5名） 團山田準〔主任〕 団滝口明子 団岡倉登志・齋藤俊輔 団生田滋</p> <p>概要 西欧植民地主義の成立、発展、思想的背景については数多くの研究がなされて来た。これら西欧植民地主義の歴史研究はヨーロッパと新大陸つまり大西洋世界、ヨーロッパと旧大陸つまりインド洋と太平洋世界を対象とし、それとは別に植民地宗主国の歴史研究が存在した。これら大西洋世界における西欧植民地主義の歴史研究からはインド洋と太平洋世界における植民地主義が見えてこない。逆にインド洋と太平洋世界における西欧植民地主義の歴史研究からは、大西洋世界の植民地主義は見えてこない。そこでこの研究班では、大西洋世界、植民地宗主国、インド洋と太平洋世界の3大研究対象を比較統合し、西欧植民地主義を再考することを目的に、いくつかの個別的研究を分担して研究しようとする物である。</p>
第6班	唐・李鳳撰『天文要録』の研究（訳注作業を中心として）
	<p>期間 2013～2015年度（研究期間中）</p> <p>メンバー（11名） 團小林春樹〔主任〕 團田中良明 団渡邊義浩・小坂真二・小林龍彦・中村聡・中村士・細井浩志・山下克明 団進藤英幸・濱久雄</p> <p>概要 『天文要録』の考察〔一〕（2011年3月）として、その第1冊（巻一）の、訳注と現代語訳を中心とした研究成果を上梓した前田尊経閣文庫蔵『天文要録』（唐、李鳳撰）に関する研究を継続する。具体的には、同書第2冊、第3冊（巻四、巻五）について同様の作業継続し、完全原稿の完成と出版を期する。</p>

第7班	茶の湯と座の文芸
	<p>期間 2014～2016年度（研究期間中）</p> <p>メンバー（7名） 田藏中しのぶ〔主任〕 田相田満・安保博史・矢ヶ崎善太郎・佐藤信一・三田明弘・高木ゆみ子</p> <p>概要 平成16年度～18年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(C)(2)「茶の湯と座の文芸の本質の研究—『茶譜』を軸とする知的体系の継承と人的ネットワーク」の成果、および2008～2011年度の東洋研究所研究班「茶の湯と座の文芸」の成果として刊行した『茶譜 卷一注釈』～『茶譜 卷七注釈』を発展的に継承すべく、江戸時代中期寛文年間の成立とされる茶道百科事典『茶譜』全十八巻の注釈研究を継続しておこなう。研究分担者は、科研費研究から継続して参加する藏中しのぶ（日本文学・上代中古文学）、相田満（人文情報学・中古中世文学）に加えて、安保博史（日本文学・近世文学）・矢ヶ崎善太郎（建築史・茶室建築）、佐藤信一（日本文学・中古文学）、三田明弘（日本文学・中世文学）、パリから高木ゆみ子（日本歴史学・茶道史）を兼任研究員に、研究参加者には笹生美貴子（日本文学・中古文学）、飯島奨（文化人類学）、加藤泰加子・北井千鶴（裏千家茶道パリ支部）、布村（日本文学・中古文学）を加え、茶道文献を対象とした学際研究をめざす。</p>
第9班	イラン文化圏における50年の社会・文化変容—フィールド調査資料の再考—
	<p>期間 2015～2017年度（継続）</p> <p>メンバー（9名） 田原隆一〔主任〕 田山田準 田須田敏彦・飯國有佳子 田鈴木珠里・南里浩子・林裕・斉藤正道・中村菜穂</p> <p>概要 イラン文化圏とは、現在のイラン国を中心に、周辺のアフガニスタン、タジキスタン、クルディスタンなどを含む文化圏をいう。イラン系民族、ペルシア語系言語、太陽暦の春分を新春（Nouruz）として祝う生活リズムなどに特徴がある。ここでは「ノウルーズ文化圏」と呼びたい。それは、インド文化圏、中央アジア・トルコ文化圏、アラブ文化圏など隣接する周辺文化圏との歴史的交流のなかで育まれたものである。また、ここでいう文化、文化圏とは、人間の生活舞台である自然生態環境、生業を基盤とした経済活動、その上に展開する社会や文化を含む総体を意味している。</p> <p>本研究では、イラン文化圏を中心に置き、それをとりまく周辺の文化圏と重なりあう混合地域にも注意を払う。なかなか変わりにくい基層文化、近現代における外から押し寄せてくる西欧近代化、さらに、今日のグローバル化の大波によってあわただしく変化する表層文化の動き。ここでは、基層と表層の両者の相互作用の過程が大きな変化要因として考察する。したがって、研究視座は、現在のフィールド現場から出発して過去へと時間を遡航するかたちで研究をすすめたい。</p> <p>研究の第2期目にあたり、先輩たちの研究成果や手法などを総括し、自らの新しい研究視点や手法を確立し、新たな研究に挑戦していきたい。まずは、標題にあるように、「イラン文化圏における50年の社会・文化変容の研究—現場から歴史へ—」に着手する。</p>
第10班	岡倉天心（覚三）にとっての「伝統と近代」
	<p>期間 2015～2017年度（継続）</p> <p>メンバー（8名） 田田辺清〔主任〕 田宮瀧交二・篠永宣孝 田池田久代・岡倉登志・岡本佳子・依田徹・佐藤志乃</p> <p>概要 岡倉天心（1862-1913）は、幼時より漢籍とヘボン塾で英語を学び、東京開成学校に入学、1877年東京大学で政治学、理財学ならびにフェノロサについて哲学を学び、卒業後、フェノロサの日本美術研究に協力し、古美術の研究と新しい日本画の樹立を目指した。86年文部省の美術取調委員としてフェノロサとアメリカ経由でヨーロッパを巡り翌年帰国、東京美術学校の創設、90年校長に就任した。</p> <p>この間美術専門誌『国華』を創刊、日本絵画協会主宰、皇室技芸員選択委員、古社寺保存会委員に任ぜられ、98年校長を辞職、橋本雅邦、横山大観、菱田春草、下村観山らと日本美術院を創設、新しい日本画を目指して美術運動をおこした。1904年（明治37）大観、春草を伴い渡米し、ボストン美術館の仕事にあたり、05年同館の東洋部長となり、06年ニューヨークで『茶の本』を出版、その年の末に日本美術院を茨城県五浦へ移し、大観、春草、観山らと住み、07年文部省美術審査委員会委員となり、08年国画玉成会を結成、10年東京帝国大学で「泰東巧芸史」を講義した。翌年欧米旅行を行い、ハーバード大学からマスター・オブ・アーツの学位を受けた。続いて12年インド、ヨーロッパを経て渡米し、13年（大正2）病を得て帰国、療養に努めたが、同年9月2日新潟県赤倉山荘で没した。英文著書『東洋の理想』（1903）、『日本の覚醒（かくせい）』（1904）、『茶の本』（1906）などは外国人はもちろん、翻訳されて広く日本人にも影響を与えた。</p> <p>岡倉天心研究はまだまだ研究されなければならない点があるが、本研究部会においては、岡倉天心の「伝統と近代」に着目し幅広い研究を進めていきたい。</p>
第11班	南アジアにおける社会変動と文化変容—周縁からのアプローチ—
	<p>期間 2014～2016年度（研究期間中）</p> <p>メンバー（5名） 田篠田隆〔主任〕 田須田敏彦・石田英明・井上貴子 田片岡弘次</p> <p>概要 南アジアは近年、経済自由化やグローバル化の流れのなかで、途上国のなかでの成長センターの一角を占めるようになったが、同時に、域内での社会経済発展の地域格差、宗派間格差、社会集団間格差、都市農村格差、所得格差が急速に拡大した。さらに、グローバル化や近代化の進行とともに、南アジア社会の家族、カースト、地域社会の態様と機能、そして人々の行動規範や価値観が大きく変化した。</p> <p>この急激な社会変動は南アジアで暮らす人々の生活と文化にどのような影響を与えてきたのだろうか。本研究では、多様な民族、宗教、カースト、階級構成をもつ南アジア社会で周縁に位置付けられてきた集団（マイノリティ、少数宗派、弱者階級、下層民、サバルタン、ダリト、アーディワシー、後進階級など）を対象として、彼らと社会変動との関わりを分析する。また、彼らはどのような文学、政治、社会運動をとおして、自らの行動規範や価値観を再構成し新たなアイデンティティを模索してきたのかを、社会学や経済学を専門とする委員と歴史学、文学を専門とする委員の共同作業をとおして、総合的に研究する。</p>

東洋研究所専任研究員研究業績一覧（2012～2014年度）

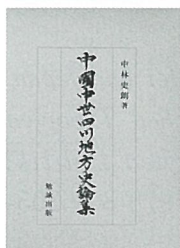
	著書・学術論文等の名称	単/共	年月日	発行所、発表雑誌、発表学会等の名称
山田準	〔口頭発表〕 天草における隠れ切支丹について報告	単	2014.9	大東文化大学東洋研究所共同研究室
	〔論文〕 菅見「日中国交正常化40周年」	単	2013.1	『東洋研究』第187号
岡崎邦彦	西安事変前の中国共産党と蒋介石国民党	単	2013.7	『東洋研究』第188号
	西安事変研究—事変発生と事態の変化	単	2014.7	『東洋研究』第192号
	〔口頭発表〕 西安事変と西北問題前後処理	単	2012.5	2012年アジア政経学会東日本大会（大東文化大学）
	〔論文〕 班彪と班固の漢王朝観、およびその諸帝観	単	2012.1	『林田慎之助博士傘寿記念・三国志論集』、汲古書院
小林春樹	『漢書』「五行志」における董仲舒の役割	単	2013.1	『東洋研究』187号
	『漢書』「董仲舒伝」における董仲舒像	単	2013.2	『古代中国・日本における学術と支配』、同成社
	ライデン大学における東アジア研究の歴史と現在	単	2014.7	『東洋研究』192号
	〔口頭発表〕 オランダ（ライデン大学）における中国学の歴史と現状 菅見	単	2013.11	公益財団法人無窮会 第59回東洋文化談話会発表大会
田中良明	〔著書〕 『藝文類聚』卷八十七訓讀附索引	共	2014.3	大東文化大学東洋研究所
	『藝文類聚』卷八十八訓讀附索引	共	2015.3	大東文化大学東洋研究所
	〔論文〕 「北斗星占小攷」	単	2013.7	『東洋研究』188号
	「北宋楊惟徳等撰『景祐乾象新書』諸本管見」	単	2014.11	『東洋研究』193号
	〔共訳〕 『陰餘叢考』訓譯卷十一之五	共	2014.3	『大東文化大学漢学会誌』53号
	〔その他〕 『岩波 世界人名大辞典』（甘徳・石中夫・藤萌・張衡・趙知微・落下闳・李梵・劉洪の8項目）		2013.12	岩波書店
	コラム「中国古代の天文学」	単	2014.9	『古代東アジアの「祈り」—宗教・習俗・占術』 『叢書・文化学の越境 22』（森話社）
	〔口頭発表〕 「敦煌文書と『乙巳占』」	単	2013.7	術数学国際ワークショップ2013-7「術数学と宗教文化」 （京都大学人文科学研究所）
	「古代中国に於ける天文占知識の所在」	単	2013.12	東アジア権異学会第89回定例研究会（大東文化会館）

2014年度 東洋研究所共同研究班活動報告

第1班	東洋における異文化の本質的相違性に関する研究									
	No.	研究テーマ（発表・演題等）			開催日時	開催場所	参加人数			
	1	各自の研究テーマに従って、「東洋研究」原稿の準備。				メール	11名			
	2	天草における隠れ切支丹について報告（山田 準）			9月18日	東洋研共同研究室	4名			
3	田中良明による公開講座			11月6日	大東会館					
〔備考（刊行物等）〕										
第2班	20世紀・21世紀における日中関係と中国の対外抵抗・対内改革・世界大同									
	No.	研究テーマ（発表・演題等）			開催日時	開催場所	参加人数			
	1	『中国語新語研究—『現代漢語詞典』（2012年第6版）の語彙を中心として—』 『西安事変研究—事変直後の張学良の誤算』			6月21日	大東会館401	11名			
	2	『露清銀行から露亜銀行—フランスとロシアの協調と軋轢』			9月27日	大東会館404	12名			
	3	『中国における朝鮮戦争をめぐる論議』			11月22日	大東会館302	12名			
	4	『中国高齢化社会における倫理リスクと倫理安全』 『「防共」と「抗日」をめぐる蒋介石の葛藤—陳立夫訪ソから西安事変勃発までの中国外交』 『蒋介石日記などから見た西安事変の深層—安藤正士先生の研究を踏まえて』			1月24日	大東会館302	16名			
5	『中国のGDPでみる経済発展』 『モンゴル国と中央アジア諸国の経済動向—対中、対日関係を視野に入れて』 『東アジアの海洋と中国の動向』			3月14日	大東会館301	15名				
〔備考（刊行物等）〕 ※ なお、小島麗逸先生「中国経済研究会」（毎月1回）との共同研究報告会を3月に開催した。										
第3班	諸外国における東西文化研究									
	No.	研究テーマ（発表・演題等）			開催日時	開催場所	参加人数			
	1	ジラルール先生論文執筆の打ち合わせ			4月10日	山田研究室	4名			
	2	ミルトン先生論文執筆の打ち合わせと講演報告書の提出				メール				
	3	シュバング先生論文執筆の打ち合わせ			5月14日	山田研究室	2名			
	4	シュバング先生講演会			10月8日	法学研究室	10名			
	5	シュバング先生国際交流講演会の打ち合わせ			12月3日	山田研究室	2名			
6	シュバング先生国際交流講演会発表			2月28日	大東会館K-0302					
〔備考（刊行物等）〕										
第4班	日中文学の比較文学的研究—『藝文類聚』を中心として—									
	No.	研究テーマ（発表・演題等）	開催日時	開催場所	参加人数	No.	研究テーマ（発表・演題等）	開催日時	開催場所	参加人数
	1	『藝文類聚』卷88訓読	4月19日	東洋研共同研究室	8名	7	『藝文類聚』卷88訓読	10月18日	東洋研共同研究室	9名
	2	『藝文類聚』卷88訓読	5月31日	東洋研共同研究室	7名	8	『藝文類聚』卷88訓読	11月2日	中国学科研究スペース	6名
	3	『藝文類聚』卷88訓読	6月28日	東洋研共同研究室	9名	9	『藝文類聚』卷88訓読	11月29日	東洋研共同研究室	7名
	4	『藝文類聚』卷88訓読	7月26日	東洋研共同研究室	7名	10	『藝文類聚』卷88訓読	12月20日	東洋研共同研究室	8名
	5	『藝文類聚』卷88訓読	8月23日	中国学科研究スペース	8名	11	『藝文類聚』卷89訓読	1月24日	東洋研共同研究室	8名
6	『藝文類聚』卷88訓読	9月27日	東洋研共同研究室	8名	12	『藝文類聚』卷89訓読	2月21日	東洋研共同研究室	8名	
					13	『藝文類聚』卷89訓読	3月21日	中国学科研究スペース	7名	
〔備考（刊行物等）〕 『藝文類聚』（巻八十八）訓讀付索引（2015年3月25日発行）										

西歐植民地主義再考										
No.	研究テーマ (発表・演題等)				開催日時	開催場所	参加人数			
第5班	1	滝口先生出版原稿の確認				5月16日	滝口研究室	2名		
	2	斎藤先生出版計画の打ち合わせ				6月18日	山田研究室	2名		
	3	斎藤先生公開講座				11月13日	大東会館 302			
	4	滝口先生出版原稿最終確認のため渡欧				1月	オランダなど			
	5	斎藤先生出版原稿についての打ち合わせ				1月15日	山田研究室	2名		
	6	生田先生公開講座計画打ち合わせ				2月28日	大東会館 302	4名		
【備考 (刊行物等)】 滝口明子著「お茶を愉しむ」(2015年3月19日発行)										
唐・李鳳撰『天文要録』の研究 (訳注作業を中心として)										
No.	研究テーマ (発表・演題等)	開催日時	開催場所	参加人数	No.	研究テーマ (発表・演題等)	開催日時	開催場所	参加人数	
第6班	1	『天文要録』巻4の訓読	4月26日	東洋研共同研究室	5名	6	『天文要録』巻5の訓読	11月22日	東洋研共同研究室	4名
	2	『天文要録』巻4の訓読	5月10日	東洋研共同研究室	5名	7	『天文要録』巻5の訓読	12月13日	東洋研共同研究室	5名
	3	『天文要録』巻4の訓読	6月14日	東洋研共同研究室	4名	8	『天文要録』巻5の訓読	1月31日	東洋研共同研究室	5名
	4	『天文要録』巻4の訓読	7月12日	東洋研共同研究室	6名	9	『天文要録』巻5の訓読	2月14日	東洋研共同研究室	4名
	5	『天文要録』巻4の訓読	10月11日	東洋研共同研究室	5名	10	『天文要録』巻5の訓読	3月7日	東洋研共同研究室	6名
【備考 (刊行物等)】										
茶の湯と座の文芸										
No.	研究テーマ (発表・演題等)	開催日時	開催場所	参加人数	No.	研究テーマ (発表・演題等)	開催日時	開催場所	参加人数	
第7班	1	会席膳部之事	大東文化大学 10508 教室 藏中研究室	21名	7	飯後路地水打事	大東文化大学 10508 教室 藏中研究室		21名	
	2	湯継酒継水継之事 附魚入			8	客人手水之事				
	3	箸楊枝之事・膳之内置合之事			9	手水之間座中疊合箸事 附案内				
	4	茶菓子入事・菓子事			10	突揚尺八竹之事				
	5	給仕作法之事・人食物作法事			11	喚鐘鉦之事				
	6	貴人相伴之事・引取後之事			12	手水間沓之事 附花入				
【備考 (刊行物等)】『茶譜』巻七注釈 (2015年3月21日刊行)										
『晉書』の研究										
No.	研究テーマ (発表・演題等)				開催日時	開催場所	参加人数			
第8班	1	『晉書校補』帝紀(二)刊行についての打ち合わせ				4月19日	早稲田大学戸山キャンパス	3名		
	2	『晉書校補』帝紀(二)原稿進捗報告				6月16日	早稲田大学戸山キャンパス	4名		
	3	『晉書校補』帝紀(二)原稿進捗報告				6月23日	早稲田大学戸山キャンパス	4名		
	4	『晉書校補』帝紀(一)修正・加筆版刊行についての打ち合わせ				9月29日	早稲田大学戸山キャンパス	5名		
	5	研究班解散後の活動計画の打ち合わせ				12月2日	早稲田大学戸山キャンパス	3名		
【備考 (刊行物等)】										
イラン文化圏における伝統と変容の研究 ―フィールド調査資料の再考―										
No.	研究テーマ (発表・演題等)				開催日時	開催場所	参加人数			
第9班	1	「ミャンマーのフィールドから―現地調査と基層文化としての精霊信仰とその変容―」(飯岡有佳子)				7月19日	大東会館	7名		
	2	「聖木と井戸：イランの地方小都市調査から―」(映像記録と解説)(鈴木均) 「第81期ペルシア語集中講座に参加して―テヘランでのプログラム評価―」(中村 菜穂) 「メイボド地方の手織り生産調査から―調査するものとされる者が逆転する時―」(吉田雄介)				9月22日	大東会館	12名		
	3	「アフガニスタン―政治社会と農村に暮らす人びとの今―」(東洋研究所公開講座)(林裕)				11月20日	大東会館			
	4	「イランの医療・福祉分野における現地調査の戦略について―」(細谷 幸子) 「1950年代のある作家の在り方―フォルグの書簡集『初めての愛の鼓動』を手がかりに―」(鈴木珠里)				12月14日	大東会館	10名		
	5	「海外出稼ぎが西アジアの農村の社会経済に与える影響」にかんする現地調査の計画について ―イランから湾岸へ、アフガニスタンからイランへ― 科研費(研究代表者:須田敏彦)(原隆一) 「イラン・イスラーム革命以前の湾岸アラブ諸国へのイラン人労働力移動」(吉田雄介)				1月25日	大東会館	8名		
【備考 (刊行物等)】										
岡倉天心(寛三)にとつての「伝統と近代」										
No.	研究テーマ (発表・演題等)				開催日時	開催場所	参加人数			
第10班	1	岡倉天心をめぐる近著の合評会(岡倉天心研究会「鵬の会」との共催)				7月26日	大東会館	9名		
【備考 (刊行物等)】										
南アジアにおける社会変動と文化変容：周辺からのアプローチ										
No.	研究テーマ (発表・演題等)				開催日時	開催場所	参加人数			
第11班	1	・2014年度の活動方針の検討 ・報告「アンベードカルの「マハール・ワタン」廃止論」				6月17日	東松山第2研究棟 小会議室	5名		
	2	・2015年度の活動方針の検討 ・報告「ペーチャエン著作におけるダリト問題の捉え方について」 ・「南インドの教会・礼拝・聖歌：土着化と多様化をめぐる」 ・報告「ネパール社会と海外出稼ぎ」				7月26日	大東会館	9名		
【備考 (刊行物等)】										

【研究員の著書紹介】 中林 史朗 著 『中國中世四川地方史論集』 東洋研究所専任講師 田中 良明



『中國中世四川地方史論集』
中林史朗著 勉誠出版
2015年5月15日発行
ISBN 078-4-585-22118-0

本所4班所属中林史朗氏(本学文学部中国学科教授)の中国四川地方史に関係する研究論文をまとめた一冊。古代から中世各時代における四川巴蜀地方の政治的状況と、統一王朝との支配関係、内外に起きる諸変乱、そこに入出する人士の動静を論ず(先秦兩漢・兩晋・南北朝の三篇十二章を収録)。また、『後漢紀』の撰者袁宏、南朝貴族廬江の何氏、北朝文人の温子昇に関する論考三点を附載する。

履歴:

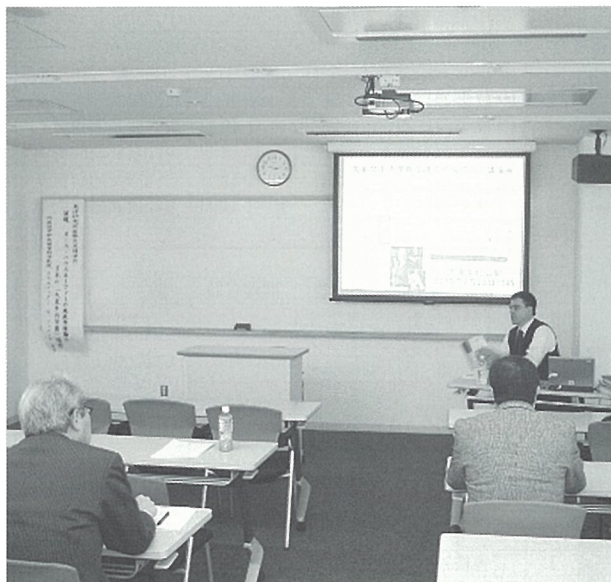
カール・ハウスホーファーは1869年、ミュンヘンで生まれ、1908年10月にドイツを出て、京都で軍事オブザーバーとして1年ほど働いた。明治天皇や桂太郎、後藤新平、寺内正毅陸軍大臣、奥保鞏参など日本のリーダー達と交流し、1910年7月に帰国した。帰国後、最初の本(『Dai Nihon』)を出し、ミュンヘン大学から博士号を受けた。母校で政治地理学や地政学の教員になり予備役軍人として年金で生活していた。彼は1924年から20年間「Zeitschrift für Geopolitik」という学術雑誌を出版し、約40冊の本を出し、数百編の論文や書評などを書いた。著作の半分ぐらいは日本や太平洋に関係するものだった。

ナチスとの関係:

ハウスホーファーは1919年からルドルフ・ヘッスの友人だった。ヘッスは1933年にナチ党の副党首になって、その仲の良さはナチ時代に有名だった。ヒトラーの外交政策アドバイザーであるヨアヒム・フォン・リッベントロップは1935年から日本陸軍の大使館付武官、大島浩と接触した。結果は1936年の日独防共協定として実った。1939年、リッベントロップは独ソ不可侵協定も交渉した。ヒトラーから見ると、外交政策的に一番大切な事は反ユダヤ主義と反共産主義であった。彼の考えによれば、日本人はアーリア人より劣った民族だったので、日独同盟の内容は空虚なものに成った。

ハウスホーファーの理論

ハウスホーファーは政治的なソ連邦と、地理学的な「ロシア」の概念とを厳密に区別した。「大陸ブロック」と言う地政学的な彼の理論において、「ロシア」とは、ドイツと日本の間の「陸橋」を意味した。日独ソの三者協力が、当時の国際外交の現状を打破できるものだった。大東亜共栄圏に取り組む者の目標は、次のようなものでなくてはならなかった。すなわち、「西洋」の学問に準じた基準と「東洋的」精神に対する期待を結び付ける



ような基礎付けが追及されねばならなかったのである。前者は、外交上なくてはならないものであり、後者は高まった愛国心の期待に応えるものであった。そのため、ハウスホーファーの「モンソーンアジアの統一」や「北・南戦略」理論に、大東亜共栄圏を望んだ日本のリーダー達や学者は強い関心を持っていた。

まとめ

1930、40年代のドイツや日本のリーダー達の中にはハウスホーファーの理論を知っていた人が多数いた。日独同盟を望んだ政治家、軍人、学者達は地政学に強い関心を持っていた。問題は、日独同盟がハウスホーファーの理論の一部分だけを取り上げた事だった。彼のペット・プロジェクトは日独ソ大陸ブロックだった。三国の協力のみが、国際秩序に変化を与える可能性を持っていたのである。

文 献

本講演は2013年6月に出版された著書に基づいています。

Christian W. Spang, *Karl Haushofer und Japan. Die Rezeption seiner geopolitischen Theorien in der deutschen und japanischen Politik.* München: Iudicium, 2013 (ISBN 978-3-86205-040-6)

■人事

兼任研究員に委嘱

【新任】中村 菜穂・佐藤 志乃

(期間：2015年4月1日～2017年3月31日)

■名簿

東洋研究所管理委員会委員 (7名)

中林 史朗 (所長・兼任研究員 文・中国学科 教授)
 山田 準 (東洋研究所専任研究員)
 岡崎 邦彦 (東洋研究所専任研究員)
 日吉 盛幸 (兼任研究員 文・日本文学科 教授)
 篠永 宣孝 (兼任研究員 経・社会経済学科 教授)
 田辺 清 (兼任研究員 国・国際文化学科 教授)
 原 隆一 (兼任研究員 国・国際文化学科 教授)

専任研究員 (4名)

山田 準 教授 (東西交渉史・貿易史)
 岡崎 邦彦 准教授 (中国政治経済)
 小林 春樹 准教授 (東洋暦学)
 田中 良明 講師 (中国思想史)

事務室 (2名)

事務長 角張 亮子
 福田 八重子

兼任研究員 (25名)

日吉 盛幸 (文・日本文学科 教授)
 浜口 俊裕 (文・日本文学科 准教授)
 中林 史朗 (文・中国学科 教授)
 村井 信幸 (文・中国学科 准教授)
 小塚 由博 (文・中国学科 助教)
 宮瀧 交二 (文・英米文学科 教授)
 篠永 宣孝 (経・社会経済学科 教授)
 高安 雄一 (経・社会経済学科 教授)
 葛目 知秀 (経・社会経済学科 講師)
 C.W. シュパンゲ (外・英語学科 准教授)
 藏中しのぶ (外・日本語学科 教授)
 田中 寛 (外・日本語学科 教授)
 齊藤 哲郎 (法・政治学科 教授)
 中村 昭雄 (法・政治学科 教授)
 石田 英明 (国・国際関係学科 教授)
 篠田 隆 (国・国際関係学科 教授)
 内田 知行 (国・国際関係学科 教授)
 柴田 善雅 (国・国際関係学科 教授)
 滝口 明子 (国・国際関係学科 准教授)
 須田 敏彦 (国・国際関係学科 准教授)
 田辺 清 (国・国際文化学科 教授)
 井上 貴子 (国・国際文化学科 教授)
 原 隆一 (国・国際文化学科 教授)
 鹿 錫俊 (国・国際文化学科 教授)
 飯國 有佳子 (国・国際文化学科 講師)

兼任研究員 (38名)

相田 満 (国文学研究資料館准教授)
 芦川 敏彦 (浜松学芸中・高等学校非常勤教諭)
 鎧屋 一 (目白大学外国学部教授)
 安保 博史 (群馬県立女子大学教授)
 池田 久代 (皇學館大学教授)
 伊藤 一彦 (中国研究所理事)
 上野 英詞 (公益財団法人笹川平和財団・海洋政策研究財団/調査役)
 植松 希久磨 (大東文化大学非常勤講師)
 岡倉 登志 (大東文化大学名誉教授)
 岡本 佳子 (国際基督教大学準研究員)
 片岡 弘次 (大東文化大学名誉教授)
 小坂 眞二 (陰陽道研究者)
 小林 龍彦 (前橋工科大学教授)
 齊藤 正道 (東京外国語大学非常勤講師)
 齋藤 俊輔 (大泉日伯センター日伯学園日本語教師)
 佐藤 信一 (白百合女子大学教授)
 佐藤 志乃 (立教大学兼任講師)
 嶋 亜弥子 (北京大学中国信用研究中心特約研究員)
 鈴木 珠里 (大東文化大学非常勤講師)
 関 清孝 (埼玉県立伊奈学園総合高等学校教諭)
 高木 ゆみ子 (東アジア文明研究センター研究員)
 中村 聡 (玉川大学教授)
 中村 士 (放送大学客員教員)
 中村 菜穂 (大東文化大学非常勤講師)
 南里 浩子 (東京国際大学非常勤講師)
 林 裕 (アフガニスタン国立カーブル大学客員研究員)
 福田 俊昭 (大東文化大学名誉教授)
 細井 浩志 (活水女子大学教授)
 三田 明弘 (日本女子大学人間社会学部文化学科教授)
 矢ヶ崎善太郎 (京都工芸繊維大学准教授)
 山下 克明 (国際日本文化研究センター共同研究員)
 由川 稔 (ベネフル総合研究所企画部マネージャー)
 依田 徹 (大宮盆栽美術館学芸員)
 渡邊 義浩 (早稲田大学教授)
 F.R. ジラルール (フランス東方学院教授)
 E. ミルトン (駐日アイルランド大使館二等書記官)
 M.C. ミリオレ (イタリア国立サレント大学教授)
 C. ラフィン (ブリティッシュ・コロンビア大学准教授)

特別兼任研究員 (7名)

生田 滋 (大東文化大学名誉教授)
 小島 麗逸 (大東文化大学名誉教授)
 近藤 邦康 (東京大学名誉教授)
 進藤 英幸 (無窮会/東洋文化研究所所長)
 中島 宏 (中国研究所研究員)
 成田 守 (大東文化大学名誉教授)
 濱 久雄 (無窮会専門図書館長)

2014年度 東洋研究所会議報告

東洋研究所管理委員会

2014年4月4日(金) 東洋研究所共同研究室
 2014年5月6日(火) 東洋研究所共同研究室
 2014年7月23日(水) 東洋研究所共同研究室
 2014年11月5日(水) 東洋研究所共同研究室
 2014年12月15日(月) 東洋研究所共同研究室
 2015年2月28日(月) 大東文化会館会議室

東洋研究所所内会議 (於：東洋研究所共同研究室)

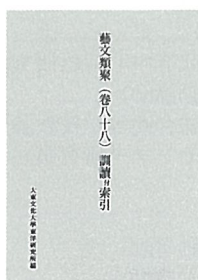
2014年4月17日(木) 2014年5月15日(木)
 2014年6月19日(木) 2014年7月2日(水)
 2014年7月17日(木) 2014年9月18日(木)
 2014年10月16日(木) 2014年11月20日(木)
 2014年12月18日(木) 2015年1月22日(木)
 2015年2月19日(木)

東洋研究所の理念・目的

東洋研究所の起源は1921年の貴・衆両院による「漢学振興二関スル建議案」の決議に由来する。この背景にある基本的理念は、①漢学を中心とする東洋学術の研究、②東西文化の融合による新しい文化の創造をめざすことにあった。この理念実現の推進母体として1923年大東文化協会が創設され、研究組織として、①漢学を中心とする東洋学術の研究部門として東洋研究部を、②東西文化の融合による新しい文化の創造をめざす比較研究部を設け、教育機関として大東文化学院を設立した。この二つの研究部は1953年学校法人大東文化大学附属大東文化研究所に継承され、1961年学校法人大東文化学園の振興計画の一環として、新たに「東洋研究所」として過去の①・②の理念を継承している。

東洋研究所の目的は、学則第6条に基づく大東文化大学東洋研究所規程によって定められ、「アジアを中心とする人文・社会・自然の科学的調査研究を行い、広く学術の発達に寄与すること。」とされている。当初研究局第一部人文科学系と第二部社会科学系の2組織がおかれ、その後専任研究員の就任に伴い人文科学班、政治・経済班、国際関係班の3班に分かれての研究活動に入った。時代の要請に従い個人研究はもとより、学際的・総合的共同研究の重要性を強調し、学際的メンバーによる研究部会を設け、研究成果を学術雑誌『東洋研究』に掲載するとともに、刊行物を発行し世に成果を問うている。また、研究成果を地域社会への還元として公開講座を開催し、国際交流の一環として、外国人講師による講演会等学術の発達に寄与することを目的に活動している。

新刊案内



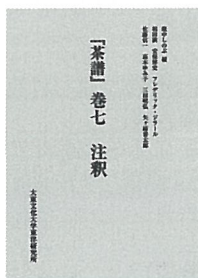
『藝文類聚』(巻88) 訓讀付索引

大東文化大学東洋研究所「藝文類聚」研究班 代表 中林 史朗

2015年3月25日発行／B5判 80,36頁／ISBN 978-4-904626-17-7 / 頒価¥6,000 (税別)

『藝文類聚』は中国の類書の中でも早い成立に属する類書で、日本文学への影響は計り知れないものがある。本書はその『藝文類聚』を巻ごとに訓読文を施し、四部叢刊に採録されている作品については校異を付し、最後に利用者の便を考慮して重要語彙索引を掲載したものである。巻87は、「木部上」の木花葉附 松柏 槐 桑 榆 桐 を収録している。

《既刊》巻1～巻16、巻80～巻87



『茶譜』巻7 注釈

蔵中 しのぶ編 相田 満・安保 博史・矢ヶ崎 善太郎共著

2015年3月21日発行／B5判 360頁／ISBN 978-4-904626-18-4 / 頒価¥13,000 (税別)

『茶譜』全18巻は、茶道流派の生成がきざし始めていた寛文年間(1661～1673)頃の成立とされ、茶道全般におよぶ総合的な類聚編纂書である。各項目について、千利休流・小堀遠州流・古田織部流・金森宗和流等、流派のちがいを対照的に提示しつつ、茶の湯や茶室にかかわるさまざまな記事を類聚編纂した茶道百科事典ともいべき性格を備えている。

《既刊》巻1～巻6



『お茶を愉しむ —絵画でたどるヨーロッパ茶文化—』

滝口明子著

2015年3月19日発行／A5判 215,29頁／ISBN978-4-904626-19-1 / 頒価¥5,000 (税別)

東洋の茶は、近代ヨーロッパの社会と文化に大きな影響を与え、世界史の中で重要な役割を果たして来た。本書は絵画と茶道具を通して17世紀以降の欧米茶文化形成とその展開の過程を明らかにしようとする試みである。オランダ、フランス、ドイツ、イギリス、アメリカ等の茶道具と喫茶図、絵本など100枚を超える図版(カラー多数)を含む。今後の茶文化研究の基盤となる貴重な基礎資料であるとともに、一般読者にも楽しめる内容となっている。

この他の東洋研究所刊行物についてはホームページをご覧ください。

刊行図書取扱店

■池上書店(大東文化大学板橋校舎内)
〒175-8571 板橋区高島平 1-9-1
TEL (03) 3932-7567

■進明堂(大東文化大学板橋校舎内)
〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿 560
TEL (0493) 34-4430

■汲古書院
〒102-0072 千代田区飯田橋 2-5-4
TEL (03) 3265-9764

大東文化大学東洋研究所所報 No.63

2015年6月30日発行

編集・発行 大東文化大学東洋研究所

〒175-0083 東京都板橋区徳丸 2-19-10

TEL (03) 5399-7351 FAX (03) 5399-8756

E-mail : tokenji@ic.daito.ac.jp

URL <http://www.daito.ac.jp>

印刷 (株) 東京技術協会